Le Commandant de Saint Exupéry.

サンニテグジュペリ著作集

11

戦時の記録 3

山崎庸一郎訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

みすず書房

サン＝テグジュペリ著作集　11

戦時の記録　3

山崎庸一郎訳

1989年9月18日　印刷
1989年9月28日　発行

発行者 小熊勇次
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15
電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京0-195132
本文印刷所 三陽社
扉・口絵・函印刷所 栗田印刷
製函 富士紙器
製本所 鈴木製本所

© 1989 in Japan by Misuzu Shobo
Printed in Japan
ISBN 4-622-00681-2
落丁・乱丁本はお取替えいたします

戦時の記録 3

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

168　ロベール・アロンの思い出

一九四三年十一月のある日、わたしはアルジェのユニオン・アンテラリエの中庭（パチオ）で彼と昼食をともにしたが、そのときサン＝テグジュペリは、フランスのさまざまな服従関係の信奉者のあいだに支配していた分派精神をまえに、おのれの悲しみを表明した。

彼は再現することが不可能なある口調で、わたしにこう言ったのである。「ああいう連中は、ドイツ人どもを毛嫌いする以上に、たがいに毛嫌いし合っているのさ！」

偉大さにも欠けていないが、危険にも欠けていない言葉だった。わたしは、アルジェで出版されたある書物、『フランス人の友愛』のなかで同種の懸念を述べ、フランスにとってなによりも重要なのは占領された国内のフランス人であるということをあえて印刷させたあとだったので、脅迫するように思わずこう反論してしまった。「じゃあ、あなたは、ラヴァルを弁護するんですか？」サン＝テグジュペリは、ひとが彼にあえて話しかけてくれるとき、おなじ反論をたくさん耳にしていたのである。

一九四三年十一月五日、サン＝テグジュペリは、下宿先のジョルジュ・ペリシエ博士宅の階段でころんだ。

この事故にかんする手紙の大部分は、ジョルジュ・ペリシエの著作『サン・テグジュペリの五つの顔』からの引用である。（G・ペリシエ、一三六―一四九ページ）。同著作は、この点にかんして、《ファンタスム》、《一連のシンドローム》だと語っている。サン＝テグジュペリはまた、腸の痛みを癌と思いこんだらしい……。

おなじくペリシエ博士宅に身を寄せていたマックス＝ポル・フーシェはつぎのようにしるしている。「いちどならずわれわれは、突然あらわにされる悲しみに驚かされた」と。（M＝P・フーシェ、『ある日わたしは思い出す……。語られた回想』、パリ、ル・メルキュール・ド・フランス社、一九六八年）。

169　G・ペリシエあての置き手紙

〔一九四三年十一月五日〕

出がけに、下の段が見えず、階段のうえで、背中からもろに、どすんところんでしまった。（ここで彼は転落の模様を図解している。）そのため（ぼくの全重量が）椎骨と尾骶骨とにかかってしまった。すごく痛い。骨折したかどうか明日診てほしい。失礼。

170　G・ペリシエあての手紙

〔一九四三年十一月三十日ころ〕

親愛なる友

耐えられないというわけではないが、わたしを半障害者にしてしまい、軽くなりもせず、リューマチとは縁もゆかりもないこの疼痛に悩まされて、今晩のわたしはすっかり憂鬱になってしまった。これまでのわたしの憂鬱は間接的なものだった。地上で理解してもらうことなどできっこないと思っていたのさ。と、こういうわけだ。

X（レントゲン医師）にたいするあなたの怒りは、わたしにある謎について教えてくれた。気の毒なX。あなたは彼がわたしの頭にいろいろと暗い考えを詰めこみ……、しかも彼があなたの所見に逆らっていると思いこんでいる……。気の毒なX。あんなに遠慮深く、控え目な男なのに。彼をかかわり合わせたのはわたしのまちがいだった。彼の所見などわたしにはまったくどうでもいいことなんだからね……。あなたにはあまり事情が呑みこめていなかったのだ。

わたしの態度を解く鍵をお渡しすることにしよう。それは悲しいことだ。それをあなたにお渡しすると、わたしの願いにもとづく応対〔サン＝テグジュペリは、ペリシエ博士自身による精密検査をのぞみ、暗に博士のほうからそれを言い出すように仕向けていた〕は、ことごとく水泡に帰してしまうのだから。わたしが願っていたことはもうどうでもいい。ひとたび表明されると、それは意味のないものにされてしまうだろうからね。しかし、あなたはわたしの応対を妙なふうに読んでしまうし、それは友情にかかわることなのだから、この点をはっきりさせたい。あとのことはどうだっていい。あとのことは仕方がない。

ねえ、そうだろう、あなたはいちどだってわたしの話をあまりまじめには受け取ってくれなかった。ドアのしたに忍ばせた置き手紙で、わたしは出来事をきわめて単純なこととして述べた。その翌日、わたしは歩きながらあなたに話した。ところがあなたは、わたしの話は聞いてくれず、わたしの外側

の態度が原因なのだろうが、ある印象を受け入れてしまったのだ。もしあなたが、階段で気絶していたわたしを発見し、援け起こし、門番の手を借りて部屋に運んでくれたとしたら、もちろん事情は別だったにちがいない。また、偶然その時間に帰宅したら、気がついたわたしをベッドに寝かせたあと、わたしの具合についてすこしは問いただし、注意深く調べてくれただろうと思う。

……わたしが心から尊敬しているあなたの医師としての力量は、この際問題ではない。わたしにはよくわからないある心理的な理由から、あなたはわたしの出来事を、些細なこと、おでこのうえのこぶにしてしまい、診察さえしてくれなかった。(それに、レントゲンを撮らなかった別のどの椎骨がすごく痛むかを知っているのかい?)

わたしは考えた。なにか損傷があるとすれば、ぶらぶらして、何週間も不具をかこつ羽目になるのはまったく馬鹿げている。検査を受けてからしかそんな権利はいただきたくない、と。

……もちろん、その検査にしても、わたしは正面からそれを要求しはしなかった。親切心からつまらぬ偏執狂に与えられるおためごかしの検査などご免だったのだ。わたしを安心させるためにあなたによって決意される検査ではなく、ちゃんと調べるためにあなたによって決意される検査をのぞんでいたのだ。それが、あなたのうちで、あなた自身によって提起された問いに答えるものであることを期待していたのだ。そうでないとしたら、それがなんの証明になったというのだろう? なぜなら、あなたは加害者でないばかりか、友人だからだ。あなたが心にやましさをいだかず、わたしにほんの一歩、ただの一歩でも踏み出すことを許すとすれば、それはあなたにとって、わたしには損傷がありえないということが自明な場合だ。千に一つも損傷の可能性があれば、それだけで、あなたの友情に

とっては、十分間の真剣な検査以前に、地面に片足をつけることさえ禁じるに十分なはずなのだ。

今回の検査の希望があなた自身から出されることをわたしがあんなにも必要としたのは、このためだったのだ。また、自分からは検査を要求せずに、あなたからのその希望を根拠づけるような材料をわたしが蒐めたのも、このためだったのだ。わたしは検査を受けることをのぞんでいた。それも、あなたによる検査を。わたしはあなたを信頼していたからだ。（そうでなければ、別のところにかけこんでいただろう。）

……Xがそれら（わたしの訴え）のひとつを認めたという事実にかんして言えば、あなたはそれにひどく立腹した。わたしは二日目に自分の誤りをさとったし、あなたもまた、わたしが一週間以上もまえから、わたしを検査しようという気持をあなたに起こさせようとして、レントゲンによる証拠を用いるようなまねは、スー族〔アメリカの一種族。白人との戦いにおいて、用心深さと策略とを発揮した〕はだしの慎重さで、いちどたりとしなかったことに気づいたのだ。わたしには第五腰椎のことなんてまったくどうだっていい。いたるところが痛いのだ。

Xにかんして言えば……彼はわたしを《かっとさせたり、あわてさせたり》しなかったばかりか、うっとりさせたのだ。わたしはつぎのように思いながら帰ってきた。「これでやっとあの先生を、わたしひとりが測りえた衝撃、わたしひとりが受けた感覚に見合った本当の検査に仕向けることができる」と。

……わたしはあなたにたいする信頼を欠いているように見えたのだろうか？　相手がだれであれ、わたしはふたりの人間の所見は絶対に信頼しない。だが、（神ではなく）人間としてのあなたにたい

するわたしの信頼は絶大だから、あなたから、あなたひとりから保証されるか通告されるかするために、わたしはありとあらゆることをしたのだ。

……これでおそらく、わたしの態度のどれひとつとして、非友情的なものではなく、まさにその反対だったということがわかってもらえただろうね。あなたからちょっとした一瞥（右足に通じる椎骨の精密検査）をせしめるためにあれほどあなたをうるさがらせたのは、あなたの力量にたいするわたしの信頼なのだ。わたしはあなたの診断なら疑わない。しかし、わたしのどこが痛いか、なにを感じているかを知らない以上、あなたには診断のくだしようがない。わたしはあなたが診断者になってくれるようにおねがいしていた。それはすこしも悪意あることではなかったのだ。

A.

171　G・ペリシエあての手紙

〔一九四三年十一月末〕

あなたに要点を説明してしまったいま……わたしは好機を逸してしまったわけだ。

わたしが検査をのぞんでいることを明かしてしまったいま、間違いなくあなたは、親切心からわたしの望みに応えようとして、それをひとつわたしに課そうとするだろうから。

そうなると、おためごかしのその検査は、なんの意味もないものになるはずだ。そんなものならもう希望しない。しかし、それがあなたへの信頼の欠如からではないことを知ってほしい。もしわたし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

が《無名氏》に変装して、あるペリシエ博士なる者に診察を乞い、その医者が、わたしに損傷の《ない》ことが《わからない》で、その有無を知ろうと努力し、その結果それがひとつ見つかるというのなら、もちろんわたしは、あなたの診察を受けるだろう。また、もしあなたが、そのような条件のもとで、《ない》とわたしに言うのなら、わたしは未来永劫安心して立ち去るだろう。わたしは絶対的にあなたを信じているのだ。

……さてわたしは、いまや、わたしを苛立たせ、ときにはある種の遺恨をこめてわたしを固執させたのは、医学的な問題よりもはるか以上に、三週間にわたってあなたに《聞く》ことを拒否されたためだということに気づいている。

しかも、結局のところ、これまた友情のしからしめることだ。

A.

172　G・ペリシエあての手紙

〔一九四三年十二月初旬〕

友よ、そうなのだ。（今回のほとんど機械的な激昂騒ぎには）友情、その忠実さ、その深さがかかわっているなんて問題外だ。よく信じてほしい。いかなる精神的、感情的、知的諍いもまた存在しなかったのだ。たとえわたしがあなたの方法、直観、診断を批判したように見えたとしても、それは、結局のところ、椎骨からくるぶしにおよぶ無駄な疼痛を感じざるをえなくしたあるものにたいする、

言語の間接的な気まぐれにすぎなかったのだ。もしあなたがわたしと同じ部屋に寝て、わたしのいびきのために眼を閉じることを妨げられたとしたら、あなただって、そんなふうに機械的にわたしを恨むにちがいない。夜明け、苛立ったあなたは、きっと、わたしの文学的趣味なりネクタイの色なりを、邪険に非難するにちがいない。そういうことはすべて、なんら興味のないことなのだ。

わたしはすごくあなたを愛しているし、このことはあなた自身が知っている。それがすべてなのだ。それにもかかわらず、一ヵ月まえから百回もあなたを呪ってしまった。しかしそのような呪詛は、持続も、深さも、重要性も持たないものなのだ。

サン＝テックス

173　X……への手紙（未投函）*

ひとは観念のためには死なない。
ひとは実質のために死ぬ。
ひとは《存在》のために死ぬ。

親愛なるX……

きみはわたしのうちに古いドラマをめざめさせた。きみは完全にわたしを絶望させてしまった。きみはわたしをよく識っている（きみはわたしの噂をしているあの蟹どもの集団のなかで、わたしを識

っているまさに唯一の人間だ）から、そのわたしが、ある論争の途中できみも言及した清朗なる平和に生きているどころか、この二年間、きみには経験してもらいたくない内心の分裂状態のなかで生きてきたことは想像できるはずだ。わたしは露出狂ではないから、ほとんどだれにもそのことは打ち明けなかった。外側から見ると、この沈黙は誤った幻想を与えることもできたわけだ。

ひとはだれでも、つくられた通りにつくられている。ある者たちは、ひとたび行動のなかに配置されると、完全な平和を経験する。そうなるともはや問題は生じない。じじつ、このわたしにしても、きみの友人のセール〔理工科大学出身の高学歴の飛行士。のちドーラと対立し、彼を辞任に追い込んだ〕が彼のよき意図の挫折によって犠牲精神を崩壊させてしまう以前のアエロポスタル社の路線でも、単に戦争任務を遂行していた三九―四〇年のあいだでも、あるいはもっと最近のことだが、P38の機上でも、十全な意味で幸福だった。わたしには自分の生命などどうでもいいし、その生命がさし出される風土は、他のどの風土より、わたしには精神的に気に入るのだ。

いや、《感情的に》と言うべきだろう。なぜなら、わたしにとっては、まさに精神的なものが感情的なものと背反する場合があるからだ。もしそうでなかったとしたら、わたしはアナーキストになっているだろう。アエロポスタル社の搭乗員仲間の風土、わたしはそれを、スペイン市民戦争下のバルセロナのアナーキストのあいだにも見出したのだ。おなじ自己施与、おなじ危険、おなじ相互扶助が見られた。人間にたいするおなじ高邁な表象が見られた。彼らはわたしに、「きみの考えはわれわれの考えとおなじだ」と言うことができた。しかし彼らが、「じゃあ、なぜきみはわれわれと行動をともにしないのか？」とたずねると、彼らが理解しうるような答えはなにひとつ持ち合わせていなかっ

た。なぜなら、彼らは感情で生きていたし、感情の次元では彼らに反対することなどなにもなかったからだ。おなじように、コミュニストにも、メルモーズにも、自分の生命を棄てることを受諾し、仲間たちのあいだで分けられるパンをすべての富よりも好ましいと考える者なら、そのだれにも反対するものなどなにひとつ持ち合わせていない。だがわたしは、コミュニスムから誕生する人間をかなり信じることがあるにしても、それとは逆に、そのおなじ人間の到来を実現しようと、カタルーニャのアナーキストを信じたりはしない。アナーキストは、おのれが勝利を収めなかったことにこそ、その偉大さを負うているのだ。もしアナーキストが勝利を収めるなら、そのスープ鉢からはうぬぼれた幼虫しか引き出すことはできないし、そんなものには興味がない。（その理由をここで説明することにしよう。）ある種の感情的陶酔を麻薬のように味わうために、なぜわたしが、自分の考えでは自分の精神的目的とされているものを破滅させることがあろう？　そんなことをすれば卑劣な行為となる。精神は感情の観点を支配すべきなのだ。ごく素直に、きみだってきみの息子を罰するときには、このことを受け入れるのだ。

　こんなわけで、ある種の場合に、カタルーニャのアナーキーのために、不正義、営利、さらには、人類のあらゆる欠点にたいして戦いながら、わたしが自分のために一時的な平和をつくり出せると希望できないことも起こるのだ。スターリンにくみした人間たちの最悪の敵たちもまた、人類の欠点にたいして戦っていたのだ。また、フランコにくみした人間たちも。デルレード〔フランスの政治家、作家。愛国者同盟を結成して、ブーランジェ将軍を支援し、一八九九年、共和制にたいする軍事蜂起を企てた〕にくみした人間たちも。モーラスにくみした人間たちも。サン＝ジュスト〔フランス大革命において、ジャコバン独裁と恐怖政治の確立に努め、テルミドールのクーデタで処刑された〕にくみした人間たちも。教皇にくみした人間たちも。

きみにとって、問題は単純だった。それは純粋に情念的なものだったからだ。愛するから愛する、憎むから憎むというわけだ。立場だけで十分だ。つくられたままのわたしにとっては、解決はもっと苦しいものだった。わたしはきみが、フランスにおいて、レジスタンスの組織のなかできみの生命を賭したものと想像している。それはきみの義務だった。わたしだっておなじように行動したにちがいない。しかしわたしは、国外にあって、不本意ながら重い責任を背負わされていると感じたのだ。その権力において重いというわけではなかったし――わたしなぞ水の一滴にすぎなかっただろう――、そうではなくて、その目的において重いという意味だった。さらに、わたし自身にとっては危険のないものだった。（いや、もっと正確にいえば、その危険はなにかに価いするというものではなかった。わたしは危険など屁とも思っていない。わたしは受け入れられた危険に赦免の力など与えない。いかにある種の勇気が死をまえにした勇気より価値があるかを知るために、わたしは犠牲を払ったのだ。死をまえにした勇気がいかに容易であるかを知るために。怒り狂っていれば、なおのこと容易なのだ。）

休戦にかんしては、わたし個人としては反対だった。わたしはボルドーで一機を盗んだ。わたしが街でかき集めた四十名の若い飛行士たちをそれに詰め込んで（それは四発のファルマンだった）、戦争継続のために北アフリカに運んだ。さてと。それが失敗だったのさ。休戦は北アフリカでも発効していた。それでわたしは失業した。

しかし、その瞬間から、わたしは自分の言葉によって取り柄があることになったのだ。わたしが微力ながら部分的に責任を担うことになった目的は、フランス国民の生き残りだった。きみは《歴史》

を勝手につくり変えることはできない。きみは展開しおえた歴史から生まれた災厄の目録をつくることはできるが、出来事の架空の流れについては、その仮定的な災厄なり利点なりをわたしに論証したり、否定したりすることはできない。だが、微少なりとおのれの有効性の度合いにおいて、休戦協定を破棄する、あるいはしない（結局のところ、すべてはこのことに帰着する）という力を手中にしていた者はだれでも、それを真剣に考えざるをえなかったのだ。

1° 一九四〇年、フランス領土内の動員可能な成年男子はすべて、ドイツ捕虜収容所という墓場に向かって出発していた。きわめて合法的に。捕虜の数は二百万ではなく六百万だ。

2° 北アフリカはドイツによって包囲されていた。教条主義的精神がこのテーゼを否認せざるをえないことはわたしもよく知っている。（ドイツはフランス戦線で疲弊し、新しい戦闘は不可能だとさえ主張されたのだ！）わたしとしては、当時無疵のドイツ（アメリカの物量も、ロシアの怖るべき底力も、ドイツ側の一千万人の死者も、まだドイツの国力を切り崩してはいなかった）は、スペインあるいはシチリア経由で、二週間で北アフリカに決着をつけると考えていた。（フランコは抵抗しえただろうか？）当地にいたのは、武器のない二十万の兵員だけだった。近代的な戦車、航空機、自動小銃の怒濤が旧式銃にぶつかったところで、敵対する両軍が蒙る損害の比率は変わらないと仮定しても、ドイツにとっては、死んでいようと負傷していようと、十九万九千九百九十九名の捕虜を釈放すれば十分で、この交換のあと、もはや前面にはたった一名の兵員しか残らない。それに、どうやらその一名は総司令官だ。しかし、彼は武装していない。（アラブ人の問題については論じない。）

3° ドイツの恫喝は絶対的に作用していた。諸都市の生き残りは鉄道の貨車だけにかかっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.